

< もくじ >	
1. 2019年度定時総会・第18回大会のお知らせ	1
2. 定時総会の招集、出欠確認・委任手続きの電磁化について	1
3. 第5回研究会合同シンポジウム概要報告	2
4. 研究会からのお知らせ	2~3
5. 各研究会の概要報告	3~5

1. 2019年度定時総会・第18回大会のお知らせ

(1) 2019年度総会・第18回大会の日程・会場について

- 1) 開催日時：2019年6月15日（土）
- 2) 開催場所：駒澤大学（駒沢キャンパス）3号館（種月館）3-211教室
（東京都世田谷区駒沢一丁目23番1号、東急田園都市線駒沢大学駅下車徒歩8分）
会場は、昨年同様駒澤大学（駒沢キャンパス）となります。

(2) 2019年第18回大会について

- 1) 第Ⅰ部：映画上映「ひとと原発」 板倉真琴監督挨拶
※ 当学会で集めた被災者支援募金の一部を、昨年、板倉監督に寄付しました。
 - 2) 第Ⅱ部：大会テーマ「新しい時代におけるコミュニティのSDGs」
※ 新3か年計画：「新たな時代への挑戦～エイジフリー社会の課題と展望」の初年度です。
※ 超高齢化、人口減少、AIの技術の飛躍的発展など、大きな変化の時代において、もっとも身近な生活領域である地域コミュニティに視点を据え、SDGsを手掛かりにしながら、コミュニティが直面する課題解決のために、ともに学び、「新たな社会の創り手」を育て、支え合う豊かな関係を築く道筋について考える場にしたいと思います。
※ SDGsとは、2015年9月に国連で開かれたサミットの中で決められた、「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称であり、国際社会共通の目標です。
- ◆ 基調講演：まちづくりとSDGs
笹谷秀光（伊藤園顧問、日本経営倫理学会理事、グローバルビジネス学会理事）
 - ◆ シンポジウム
 - ★庄司信明（元朝日新聞スポーツ記者、桜美林大学非常勤講師、当学会会員）
 - ★中村昌子（元日本航空客室乗務員、市川市教育委員会外国語指導員、市川市環境保全課認可地域猫活動団体「妙典 Cat Fellow Net 当学会会員）
 - ★小平陽一（さやま市民大学講師、蚊トンボファーム代表、当学会会員）
 - ★笹谷秀光（コメンテーターとして再登壇）

2. 定時総会の招集、出欠確認・委任手続き方式の電磁化について

JAAS News236号でお知らせしましたように、今年度から、定時総会の招集、出欠確認・委任手続きに電磁式（メールならびにWEB回答）を加えることとなりました。

3月22日に方式の選択確認メールを、返信期限を4月10日として差し上げました。返信日

を過ぎた後も猶予を見ておりましたが、本号送信時に回答を締切りました。

確認メールに返信をいただかなかった会員の皆様は、電磁式を選択されたものとさせていただきますので、ご了承ください。なお、JAAS News を郵送で受け取っている会員の方々は、従来方式となります。

3. 第5回研究会合同イベント概要報告 「シニアのICT活用」研究会主催 「人生100年時代を豊かに生きるためのICTの可能性 ～シニアの活用を支えるサポーターの役割とは？」

【開催概要】

開催日と会場 2019年3月16日(土) 東京家政学院大学

開会の挨拶 袖井 孝子(シニア社会学会会長)

基調講演 犬童 周作(総務省情報流通振興課長)

「人生100年時代を豊かにするデジタル活用支援員」

パネルディスカッション

「サポーターとしての活動を一步踏み出すために求められること」

司会 澤岡 詩野(当学会理事・ダイヤ高齢社会研究財団)

パネリスト

森 やす子(当学会理事)

「シニア社会学会で取り組んだサポーター養成講座の振り返りから」

辻 巖(ダイヤネット代表)

「企業退職者を中心にしたグループが地域で展開するITサロン」

高島 雅夫(DAA池袋・スマホサロン主宰)

「独自に生み出したノウハウでシニアをサポートしてきた取り組みから」

閉会の挨拶 濱口晴彦(シニア社会学会副会長)



当日はくもりであったが、54名(会員17名、非会員37名)の参加があり盛況であった。シンポジウム終了後には茶話会形式の懇親会を行い、パネリストと個別に意見交換を行った。アンケートでは、シンポジウムテーマへの関心の高さが同え、自身にとっての意義も大いにあったという回答であった。自由記述の記載も多く、参加者の満足も高かったように見受けられた。

シンポジウムの詳しい報告は、「エイジレスフォーラム」17号に譲ることにするが、基調講演では犬童課長からは総務省で検討されているデジタル活用支援員について、活動を担う人材としてシニアに期待していること、活動のあり方、支援員の位置づけなどについてお話があった。

(森 記)

4. 研究会からのお知らせ

(1) 第118回「社会保障」研究会開催のお知らせ

1) 日 時：2019年4月24日(水) 18:00~20:00

2) 報告者：川村匡由(武蔵野大学名誉教授・シニア社会学会理事)

3) テーマ：「老活・終活のウソ、ホント」

4) 会 場：日本労働者協同組合連合会 会議室

東池袋1-44-3 池袋ISPタマビル 8階

※ ご質問がございましたら、阿部(旧姓佐藤)まで

090-4436-6853

(2) 第55回「災害と地域社会」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時：2019年4月24日(水) 18:00~20:00
- 2) 場 所：早稲田大学戸山キャンパス39号館(会議室未定)
- 3) 報告者：松村 治(会員、早稲田大学人文総合科学研究センター招聘研究員)
- 4) テーマ：「福島からの東雲住宅避難者生活の経緯と現状、今後の課題」(仮)
- 5) 参加費：当分の間頂戴しません。

※ 問い合わせは、福原(fukuhara@jaas.jp)までお願いいたします。

(3) 第65回「シニア社会のリテラシー」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時：2019年4月25日(木) 15:00~18:00
- 2) 場 所：早稲田大学・国際会議場4階第6共同研究室
- 3) テーマ：濱口座長のレクチャー
〈タイトル〉「シニア社会のパスポート — 幸福の社会学・世間との付き合い方」

4) 参加費：300円

※ お問い合わせは、島村(ken-sima1941@jcom.home.ne.jp)までお願いいたします。

(4) 第11回「ライフプロデュース」研究会開催のお知らせ

- 1) 日 時：2019年4月26日(金) 18:00~21:00
- 2) 場 所：内幸町 日本プレスセンター内日本記者クラブ9F ラウンジ
- 3) テーマ：「地域に密着した活動で、後継者を育てる術」
- 4) 参加費：500円

※ お問い合わせは中村(nakamura@jaas.jp)までお願いいたします。

5. 各研究会の概要報告

(1) 第10回 「ライフプロデュース」研究会の報告

- 1) 日 時：2019年3月22日(金) 18:00~21:00
- 2) 場 所：内幸町 日本プレスセンター内日本記者クラブ9F ラウンジ
- 3) テーマ：読書会「ネガティブ・ケイパビリティ〜答えの出ない事態に耐える力」(帚木 蓬生著)を読み、1章から10章までの1つの章を選んで、私見を述べよ。
- 4) 参加者：珍しく5名と少なかったが、最近話題を集めている「ネガティブ・ケイパビリティ(negative capability)。どんな概念・意味なのか?提案者によると「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようもない事態に耐える能力」を指すという。世間では一般に問題の解決を急ぐあまり、既存の理論や考えによって、直ぐに答えを出そうとするが、そうした態度から一歩引いて、「性急に証明や理由を求めず、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」を意味するのだとされる。著者は臨床40年の精神科医で作家。

各人が熱心に披露し合った私見、そのエッセンスだけを絞って報告しよう。第9章「教育とネガティブ・ケイパビリティ」の選択者は、「学べば学ぶほど未知の世界が広がっていく。学習すればするほど、その道がどこまでも続いていることが分かる。あれが味だと思って坂を上り詰めても、またその後ろに、もう一つの高い山が見える。そこで上のを止めてもいいのですが、見たからにはあの峰に辿り着いてみたい。それが人間の心の常であり、学びの力でしょう。つまり、答えの出ない問題を探し続ける挑戦こそが教育の神髄でしょう」。

「私たちの脳は生来的に、物事をポジティブに考えるようにできていて、そんな楽観的希望の効用は医学的にも証明されている。その好例として、精神医学的には数種類の障害を持っていた放浪の画家、山下清を例に挙げ、彼の才能を育んだのは、周囲の温かい共感とネガティブ・ケイパビリティではなかったか。そんな環境の中では、障害のある脳も希望を持ち、世にまたとない作品を遺した」。これは第6章「希望する脳と伝統治療師」の選択者の意見である。8

年ほど前、定年退職と同時にキャリアカウンセラーの養成学校へ通った経験から、第5章「身の上相談とネガティブ・ケイパビリティ」を選んだ人。教師から「貴方は面倒見がよく、お節介な面もありそれ自体は悪いことではないが、カウンセリングとなるとその性格が災いして、相談者の気持ちに入り過ぎたり、悩みを背負ってしまうこともあるかも?」「カウンセラーとは基本的には傾聴と共感に徹することが原則、あくまで相談者自身が自分の悩みの本質に気付くまで根気よく寄り添うことが使命!」とも。「このカウンセラーとして求められる能力こそ、ネガティブ・ケイパビリティだったのかな」と今は受け止めている。

第4章「ネガティブ・ケイパビリティと医療」を選んだ人は、終末期医療を絡めて「医学教育で重視されるのは『ポジティブ・ケイパビリティ』で、診療録の記録でもSOAP(Sはsubjectで患者の主観的な言動や症状、Oはobjectで検査で得た客観的なデータ、AはassessmentでSとOの判断評価、Pはplanで解決のための計画・治療方針を言うのが当たり前だが、例えばターミナル医療では上記の考えでは対応できないことが多々ある」「そんな場合、人間は誰も見ていない所では苦しみは耐えられないものであり、共感とホールディング(抱える)や今生じていることに、手を加えずに持ち応えることである。またヒューマニティーは医療のホルモンである、など含蓄のある言葉がある。近代科学の進歩でIPS細胞から殆どの細胞が出来る今日でも、人の心や精神の問題解決とは、ある意味で永遠のテーマであることにホッとした」。

1つの章にこだわらず「この本を読んで」と題した論評者は、「本の内容は、いちいち腑に落ちる。『答えの出ない事態』というのは、我々の周りにあまた存在する。考えてみれば、我々が受けて来た教育と言うものは、ほとんどが答えありきだったように思える。○か×か、白か黒か。本当は濃淡のあるグレーとか△や□があったはずなのに。」「日本の近代化の過程において、我々は急速に西洋文化を取り入れて、どっぷりと浸っているように見える。その過程で見失ってきたのは東洋的曖昧さや、和の調和性ではないだろうか?理論性や対処療法を得意とする西洋医学に対して、経験や演繹に基づく東洋医学。ネガティブ・ケイパビリティは東洋医学に近いのではないだろうか?」。

※ この月例会の詳細は、「ライフプロデュース」研究会のブログでご覧願います。(皆川記)

(2) 第117回「社会保障」研究会の報告

- 1) 日 時：2019年3月27日(水) 18:00~20:00
- 2) 報告者：金 貞任(東京福祉大学教授)
- 3) テーマ：「日韓の単身要介護高齢者の介護状態と看取りケア」
- 4) 会 場：日本労働者協同組合連合会 会議室
東池袋1-44-3 池袋ISPタマビル 8階

第1に、全体の傾向として日韓ともに単身高齢者世帯は増加しているが、三世帯世帯は減少の傾向にある。死亡場所は、日韓ともに医療機関の割合が高く、韓国では2000年度後半からその傾向が顕著である。韓国では、要介護認定者の療養病院への入院率が高く、近年ではケアマネジメントと統合在宅サービスのモデル事業の実施による訪問看護師の週に1回の在宅訪問が特徴である。

第2に、地域の単身要介護高齢者を対象とした日韓の量的調査の結果、ともに単身要介護高齢者は女性が7割以上。主介護者は、日本の子どもの割合が3割以上、韓国のヘルパーの割合が5割以上であった。日韓ともに食事、排泄、着替えの自立の割合が高く、買物、食事の後付けなどの自立の割合が低かったが、日本ではデイサービスの利用、韓国では訪問介護の利用に偏っていた。介護・入院費用の負担は、日本の本人負担が韓国よりも2倍高く、家族介護者の介護手当の導入は、日本のほうが韓国よりも賛成の割合が非常に高かった。日韓ともに社会的孤立よりも社会的孤独感の割合が高く、その割合は韓国のほうが日本よりも若干高かった。

第3に、看取りケアの場所について、日韓ともに在宅を望む割合が5割、在宅選択の可能性の割合が3割強であった。看取りケアの場所選択意識の関連要因に関して(カイ二乗検定)、韓国のみ主介護者がいる者は在宅の選択意識が高かった。掃除・洗濯ができない日本人は、入所施

設を選択し、電話への対応、買物、金銭管理、電化製品の簡単な手入れの一部支援が必要な韓国人は在宅を選択する傾向があった。日本人のみデイサービス利用者は在宅選択の割合が高く、短期入所利用者は入所施設を選択する傾向があった。単身要介護高齢者が望む場所で最期を迎えるためには、サービス提供者と単身要介護高齢者などへの看取りケアに関する正しい情報の提供が重要である。 (金貞任 記)

(3) 第64回「シニア社会のリテラシー」研究会の報告

- 1) 日 時：2019年3月28日(木) 15:00~18:00
- 2) 場 所：早稲田大学・国際会議場4階第6共同研究室
- 3) テーマ：井上智弘著『人口知能と経済の未来』(文春新書刊)を読み解いて— <その2>
- 4) 発表者：薄井 滋、安田 和紘(研究会コーディネーター)

薄井さんは、AIと人間の関係、AIが人間の仕事をどの様に規定して行くのかという問題意識を諸文献を読み解いて分析された。そしてBI(ベーシックインカム)については、BIという表現は社会保障と混同されることから、UBI(Universal Basic Income)と表現したいこと。締め括りとして、UBI+AIによってもたらされる「ユートピア」は、「自然体で楽々と生きる」世界であると思うと述べられた。

安田さんは、前回に引き続いての発表であるが、今回は同著書の論点を整理された。1つは「シンギュラリティ」への疑問。2点目はAIの発展に伴って、人間はそれにどう対応して行くのか。3点目はBIの問題点について、日本においてベーシックインカムの実現の可能性について解説された。

濱口座長は、AIをテクノロジーの側面から考えると問題があること。AIにより、仕事が奪われるのではなく、仕事が置き換えられるのである。そしてAIとBIに問題があるとすれば、高齢社会の中でどう関わるかを整理しておく必要があるとコメントされた。(島村記)

一般社団法人シニア社会学会・事務局(月・水・金オープン)
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-27-4 ナカヤビル202
電話&FAX:(03) 5778-4728
eメール: jaas@circus.ocn.ne.jp URL: <http://www.jaas.jp/>